



### 【神のすべて良い働きのために十分に整えられる道】

聖書本文：ネヘミヤ記8章1-12節・暗唱聖句：テモテへの手紙第二3章15～17節

説教者：鄭南哲牧師

愛するクリスチャンプレイズチャーチの信仰の家族のみなさん！一週間の間も、元気で、主の平安で守られたでしょうか？創世記から始め旧約の聖書を順次で講解をさせていただいています。今日は旧約の16番目であるネヘミヤ記についてお話させていただきます。説教の目的と言うのは神様の御言葉を解説し、我々の生活に適用してイエスキリストを信じる信徒として、弟子として生きようと促がすことだと思います。聖書の御言葉を一冊ずつ説教することによって御言葉がもっと理解できるようにと助けることこそが、説教者の使命だと思います。今日我々を招く聖書はネヘミヤ記です。

39冊の旧約聖書の中‘歴史書’と呼ばれている聖書は 17冊です。

旧約の歴史的な御言葉は、神様に選ばれて、神様を信じていたイスラエルの民族の歴史の中で行われた神様の救いの働きに関する記録ですので、当時の歴史的背景を知らなければ、すぐに理解できない箇所がかなりあると思います。17冊の預言書も北イスラエルと南ユダに宣べ伝えられた神様の御言葉ですので、歴史的背景を知る事がとっても大切です。そうでなければ、その聖書の本文の意味を正しく解釈し理解することは難しくなるからです。

### ＜聖書本文の背景＞

いま集っている方々の中には長らく、教会に出席している方もいれば、最近教会に来ている方々もいますので、先ほど読んだ本文について申し上げる前にまず本文の背景を説明させていただきます。

ネヘミヤ記は神様がネヘミヤを通して記録させた聖書です。1人称(にんしょう)自伝的記録(じでんてききろく)となっています。ネヘミヤという言葉は“神様の慰め”という意味です。聖書を見ると、名前に‘ヤ’という言葉がよくついています。この‘ヤ’という意味はエホバ(神様)を意味します。たとえば、イザヤは‘エホバは救い主である’、マルキヤという名前の意味は“エホバは私の王”という意味になり、ウリヤは“エホバは私の光”という意味です。

このネヘミヤ記はネヘミヤによってエルサレムの城壁再建(1-7章)とイスラエルの民の道徳的、霊的改革運動(8-13章)が記録された聖書ですが、約25年間の間の内容です。

本文の背景をまとめて申し上げます。

先週の説教で、すでに申し上げましたが、南王国ユダも偶像崇拜のためゼデキヤ王の時、滅ぼされ、民はバビロンに捕虜として連れられて行きました。70年間捕虜としていた彼らは新しい帝国であるペルシアによって本土ユダヤのエルサレムに戻ることができました。ユダヤ人たちの帰還は神様の約束通りになされたことを表してくれます。

イスラエルの民が70年間の捕虜生活後本土に戻ると言うことは予め、エレミヤ預言者をとおして仰せられました。それだけではなく、イスラエル民の帰還は回復してくださる神様を表します。イスラエルの民が偶像を拝み、神様に不従順した時、彼らを懲らしめましたが、時となり、彼らを回復させてくださったのです。我々も時々、神様の凝らしめを受けるときもありますが、神様は我々を永遠にそうさせないで、我々の傷を癒し、傷ついた魂を回復させて下さると言うことを教えて下さいました。

イスラエルの帰還は2回目で終わらず、もう一度、三回目まで行われます。

紀元前536年約5万人が1次帰還し、それから約80年が過ぎた紀元前458年には第2次帰還がありました。この時の指導者がエズラで、帰還された人口は1758人でした。それからまた13年が過ぎた紀元前445年、第3次にイスラエルの民が戻ります。この時の指導者がネヘミヤでした。

ネヘミヤはどんな人だったのでしょうか？彼は捕虜として連れられて行ったイスラエル人だったのにもかかわらず、ペルシアのアルタシャスタ王(465-423BC)の献酌管(けんしゃくかん)になりました(ネヘミヤ記1:11)。献酌管というのは今の時代だと王の飲食を担当する秘書として当時はとても大切な身分でした。ネヘミヤは王がいるシュシヤンの城で勤務しましたが、このシュシヤンの城と言うのはペルシア王が冬を過ごしていた官邸でした。ネヘミヤは王と直接会うこともでき、影響を与えることのできるほどの権力もありました。捕虜出身の彼が当時これほどの地位に上がったのはよほどの信頼を得ていたことが分ります。ところが、さきにエルサレムに帰った彼の弟であったハナニからエルサレムに残っている人々が今困難の中におり、エルサレムの城壁は破壊されたままで、城の門も焼き尽くされたと言う知らせを聞きました(ネヘミヤ記1:1-3)。

悲しい知らせを聞いた彼は何日間神様の前で断食しながら祈り、王の前に出て本国に戻るようにと許しを求めました。そういうわけで、彼は王からの承諾を得て、ユダの総督という資格で本国に帰還し12年間総督として働きました。ユダに戻ってきたネヘミヤは返ってきた四日後破壊されたエルサレムの城を回ってみて、さっそく城壁を立て直す作業に取り組みます。聖殿は再建されましたが、城壁はまだ立て直らずでしたが、この城壁は聖殿とともにユダヤ人たちの精神的基盤でした。しかし、エルサレムの城壁を再建することに北のサマリア人たちからの妨げがたくさんありました。ネヘミヤ4章と6章にはおもに城壁建築への妨害する話は記録されています。それにもかかわらず、神様の奇跡的な恵みによって52日間でネヘミヤの指導のもとで、城壁建築が完成されます。

これで、外側の環境は整備(せいび)されました。ユダヤ人たちが帰還してから聖殿は再建築され、多くの妨げもありましたが、城壁も再建されました。エルサレムの都市も新しくなりました。生活も落ち着いてきました。しかし、これでネヘミヤの使命が終わったわけではありません。もしかするとこれよりもっと大切なことが残っていました。これがまさに霊的リバイバル(内側にイスラエルの民を信仰的に新しく立たせる事)でした。これからはエルサレムの城の中に住んでいる人々が神様の御言葉によって変えられ、改革され、霊的にリバイバルされる課題が残っていたのです。これを任された人が書記官エズラでした。今日の本文は学者エズラを通して神様の御言葉を聞いて、悔い改めることにより神様からの大きいリバイバルと改革が起こるすばらしい場面です。

### <今日のための御言葉>

今日の本文が我々に与えるいくつかの大切な教訓があります。

**一つ目は、イスラエルの民に神様の御言葉への熱望があったことです(1,3節)。**8章1節によると、“民は、みな、いっせいに水の間の前の広場に集まって来た。そして、彼らは、主がイスラエルに命じたモーセの律法の書を持ってくるように、学者エズラに願った。”

イスラエルの民が水の間の前に集まりました。お年よりも、子供も、青年も、男も、女もそして話がわかる人はみな集まりました。そして、学者エズラに神様の律法の書を持ってくるようにとお願いしました。まず、民たちの方から御言葉を聞かせてくれとお願いしたのです。学者エズラからではなく民の方から神様の御言葉に対する飢え渴きをもってお願いした事です。それとも水の門の前の広場で、夜明けから真昼まで(約6時間以上)民はみな、律法の書に耳を傾けた(3節)と書かれています。今までの70年の間、異邦の国で住んでたし、長らく御言葉も聞けませんでした。我々にいのちの御言葉を聞かせてくださいとお願いしたのです。我々は人生の歩みの中で様々な苦難と苦悩を経験しますが、我々が持つべき大切な飢え渴きは**問題の解決者である神様の御言葉に戻ろうとすること**です。我々に神様の御言葉を聞かせてください！と

イスラエルの民はそういうわけで子供から始め、年配の方々までみな集まって御言葉を聞かせてくれるようにとお願いしたのです。そして何時間も御言葉に傾けていました！それで、もう一度悔い改め、新しく、力強く始まる神様からのリバイバルを経験することができたのです。

どこの国であっても神のリバイバルが生じ、神の教会が力強く成長したところではみんな共通に神の御言葉に熱心と熱望がありました。韓国にも1907年大きなリバイバルがきっかけになり、今日まで主の教会たちと信じるクリスチャンたちは祝福され、成長されて来ています。そのリバイバルが起こった理由は特別な事では決してありません。聖霊の神の神秘的な奇跡でもありません。神が下さった御言葉に対する強い、熱い熱望にありました。

初代の韓国のクリスチャンの方々はどこかの地域で聖書学び会があると聞けば、毎日15キロほどのみちのりもいとわず通いながら、一週間でも10日でも、神の御言葉を学べる事に大変熱心でありました。その頃の韓国の人たちは貧しくて、文字をやっと覚えた程度にしか学んでいませんでしたが、牧師先生が黒板に書いてくれる聖書の内容を木炭のような小さな木の物で必死について書いたり、恥を忍んで聖書を必死に書き写したり、神の御言葉に対する韓国の初代クリスチャンの熱心には今勝つことができないと思います。神様が神のすべての良い働きのために我々を用いるために、そして神に用いられるために必ず必要な姿勢があります。神の御言葉に熱心に聞き、従うとする熱望ではありませんか。

**テモテへの手紙第二3章15～17節：「聖書はあなたに知恵を与えてキリスト・イエスに対する信仰による救いを受けさせることができるのです。聖書はすべて、神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練とのために有益です。それは、神の人が、すべての良い働きのためにふさわしい十分に整えられた者となるためです。」**

神の人が、すべての良い働きのためにふさわしい十分に整えられた者となるためには、いつも神の御言葉に立ち返ってたえず謙遜に神の御言葉から学び、たえず正しい姿勢に、方向に矯正され、義の訓練を受けなければなりません。

我々はどうですか？ 10年、20年それ以上長らく教会に通っていても聖書をまともに読まず、生きている姿はないでしょうか！ 30-40分の聖書のメッセージの時間の時でも耐え難いのが今の我々の姿ではありませんか。

当然人生には様々な問題があります。人はすぐ倒れやすい者です。人はすぐどちらかにかたよりやすいものではありませんか。そんなさまざまな問題にぶつかるたびに自分に頼らず、謙遜に神様の御言葉に戻って神様の御言葉による神の知恵と助けを求めるつつそれに相応しく信仰を持って乗り越えていかなければなりません。そのためには今、いつも神様の御言葉に対する関心と熱心をもう一度いただくみなさんとなりますようお祈り申し上げます。

### 二つ目、神様の御言葉に対する真摯な姿勢を持っていました(5,6節)。

イスラエルの民には神様の御言葉に対する信頼と従順がありました。神様の御言葉が宣べ伝えられる時、民はみな立ち上がり御言葉に耳を傾け、主をほめたたえました。人の知恵と高慢を捨てて、神様の御前で悔い改め、御言葉の前で、自分たちの偽善と罪の衣を脱いで、謙遜に神様の御言葉を受け入れたのです。

**三つ目に、即刻の悔い改めと実践がありました(9節)。**9章1節によると、悔い改めと告白のムーブメントが起こります。神様の御言葉を聞くと、自分を省みるようになります。神の御言葉を聞いたイスラエルの民も悔い改めの祈りが9章3節から38節

まで続いています。これがネヘミヤ書に記録された霊的リバイバルと悔い改めのムーブメントです。

昔ローマにアウグスティヌスという人がいました。長い間の母親の祈りにもかかわらず、さまよって異教に外れ、性的にも墮落し、傷だらけの人生を送っていたアウグスティヌスでしたが、良い機会が訪れました。知識的に、学問的に天才だった彼はローマの宮殿で教授として過ごす事ができたのです。しかし、神は彼に全く違う計画をもっておられました。ある日イチジクの木の下を歩いている時、急にアウグスティヌスに神の御声が聞こえます。「取って読みなさい！」と。彼は、その時から聖書を探して真剣に読み進めました。聖書を読んでいる中、ローマ13章14節に、「主イエスキリストを着なさい。肉の欲のために心を用いてはいけません。」という御言葉に強く打たれました。今まで、自分が隠して来た自分のさまざまな情欲と執着に縛られて来ていた自分を神は自分の事をすべて見ておられ、知れおられるのにも関わらず耐え忍んで下さった神の愛に気づき、悔い改めます。それは386年8月のことであり、アウグスティヌスは、その以来毎日聖書の御言葉を読んでいるうちに、その翌年の4月、涙を流しながら、洗礼を受けました。

クリスチャンになってから、彼は聖書、教理、神学の研究の活動などを情熱的にしながら、多くの当時異端やカルトの攻撃や妨げから真理の神の御言葉と主の教会を守るながら、さらに広げるまで使徒パウロのような大事な役割を果たした者として用いられました。彼のそのような原動力はどこからだったのか、彼が召されてからみんなが分りました。

430年8月、死を前にしたアウグスティヌスは、ダビデによる悔い改めの詩篇の御言葉を壁に張って毎日読みながら祈ったそうです。時には泣き叫びながらよく祈られました。神のふところに抱かれ、御国で安息されるまで、アウグスティヌスはたえず神の御前で悔い改めた生き方にありました。イエスキリストを信じるクリスチャンの人生は、神の御言葉により悔い改めを通して生まれ変わり、悔い改めにより成長し、悔い改めにより天の御国の民として生きるのではないのでしょうか。

愛する信仰の家族みなさん！我々に至急必要とされることがあれば、それは霊的覚醒と神様の御言葉に対する飢え乾いた魂です。イスラエルの民が捕虜とされた地から帰って来てある面、外的なことは全部そろいました。聖殿も建築したし、城壁も再建したし、生活も落ち着いてきました。そして、都市も整備され、あらゆる妨害勢力も追い払うことができました。もうこれで十分だ、これで安全だと思いましたが、彼らにはまだ必要なことがありました。それは神様の御言葉による内面的信仰の満たしと改革でした。我々も同じです。我々には住むところもあり、職場もあり、子供たちも元気に育ち、なんの問題がないと思われるかもしれませんが、その時、我々は自分たちの内面を見なければなりません。

この世的にはすべてをそなえたと安心する時ではなく、我々のうち側の人々が傷ついた魂として生きているのではないかと点検する時です。自分の魂が病気のままではないのか、奥底の所で罪を犯している自分はないのか、霊的脱水状態ではないのか、霊的渇いている状態ではないのか、御言葉の鏡に照らしてみるのはどうでしょうか？ だれも知らない自分だけの空間はどんな状態でしょうか？ 自分はどんな霊的状态でしょうか？ いま我々に至急必要なのは自分の魂をみつめる洞察力ではないかと思えます。この霊的飢え渇きこそが自分を変え、神様の御言葉にもっと近づかせ、御言葉とともに生きようとさせてくれると思えます。

いまの我々にもこのような覚醒がなければなりません。自分を一番良く知っているのは自分自身です。しかし、神様は自分が自分を知っているよりもっとよくご存知です。我々を造られた創造主なる神様は我々がどう生きていけば幸せになるか、どうすれば、霊的飢え渇きを満たすことができるのか、神様の御言葉である聖書は今日も我々に教えて下さっています。今日も神様の御言葉に飢え渇いた心で、自分に与えられる神様の御言葉にさっそく反応し、悔い改め、従うことにより、日々、我々の霊と内面が新しくされ、満たして下さる神様の恵みと平安をいただいて、残りの11月も元気良く、主とともに歩めます。愛するクリスチャンプレイズチャーチの神の子ともたちとなりますよう主イエスキリストの御名によって祝福します。アーメン!!